

広島・長崎—原子爆弾の記録

昨夏にもレポートしたが、名大中央図書館 4 階に「飯島宗一元学長寄贈コーナー」がある。原爆関係の貴重な資料が陳列されており、よく手にしている。1978 年 5 月 5 日に「子どもたちに、世界に！被爆の記録を送る会」から刊行の表題資料もその一つだ。

中表紙裏には「あの日 この子の目の前で 起きたことを
知っていただきたいです あなたに
そして 日本の子どもたちに
全世界の人びとに」と書かれている。

表紙などに掲載されている、長崎
の子どもの表情がなんとも言えない。

「市内電鉄線路際の路上で、救援隊から炊き出しのおむすびを手渡された母子。すぐ食べる元気もないように見えた」とある。井樋ノ口で 8 月 10 日午前、撮影とある。

「はじめに」から—その時は、気持よく晴れわたって、今日もまた蟬しぐれと暑さとにじりじりと焼かれそうな…そんな一日が、始まろうとしている朝でした。1945 年 8 月 6 日午前 8 時 15 分。広島市の上空で、人類史上はじめて、米空軍によって実戦使用された原子爆弾（ウラニウム爆弾）が、さく烈したのです。

あの日、深い朝霧が立ちこめていた長崎も、やがて強い日ざしのもとで霧は晴れ、典型的な暑い夏型の一日になろうとしていました。8 月 9 日、午前 11 時 2 分。広島から 3 日目。再び、原子爆弾（プルトニウム爆弾）が投下されました。その結果、広島で 13 万～14 万人が、長崎で 6 万～7 万人が命を失いました。第 2 次世界大戦の末期のことです。人間の歴史のなかで、そのときほど恐ろしい出来事はありませんでした。しかもその悲惨は、戦争という人間の異常な営みのもとで、人間の意志と手によってひき起こされたことであっただけに、いっそう恐ろしい出来事だったということが出来ます

そのとき、広島と長崎はどうなったか。人びとは、生活はどうなったのか。その事実を、写真と絵画によって物語ったのが、この記録集です。写真類は、原爆の被爆当日から約 2 ヶ月間に撮影されたものが中心になっています。絵は、被爆の翌日実際に現場でスケッチしたものと、約 30 年後に被爆者自身が、鮮明に残っている記憶をもとに描いたものです。収録された写真は約 4000 点に及ぶ資料のなかから、絵は 2000 枚近いものなかから選びました。しかも写真は、その大部分が当時撮影した原版フィルムから焼付けられたものです。こうした資料が総合的に編集された本が出版されるのは、日本でも初めてのことです。



(2016 年 10 月 15 日)